

聖書：第一列王記20章1～21節

説教：わたしこそ主である

はじめに

イスラエルが北と南に分裂した後、それぞれがどのような道をたどっていったのかが第一列王記に書かれていて、特に今日の所には、北王国の七代目の王となったアハブに焦点が当てられています。彼は、異教の神であるバアルを信仰するイゼベルを妻として迎え、彼自身もバアルを拝み、「彼以前のだれよりも主の目に悪であることを行つた」と聖書に書かれるほどのひどいことをした人でした。

そんなアハブの所へ神は預言者エリヤを遣わし、何度も悔い改めの機会を与えます。ところがアハブ王はかたくなでまったく悔い改めようとしません。今日の箇所では、アハブ王が、イスラエルのすぐ北隣にあったアラムから脅迫を受けたとき、どんな事が起こったのかが書かれています。ここに神のどのようなみこころが記されているのか、一緒に見てまいります。

## 1 アラム王ベン・ハダド

アラムの王ベン・ハダドはあるとき、北王国の首都であるサマリアに軍を進め、これを包囲すると、ただちに使者を送って、こう言わせます。3節。「ベン・ハダドはこう言われる。『おまえの銀と金は私のもの。おまえの妻たちや子どもたちの、最も美しい者も私のものだ。』」これを聞いたアハブ王は、こう答えます。「王よ、仰せのとおりです。この私、および、私に属するものはすべてあなたのものです。」

文字だけ読むと、アハブはあっさりとアラム王に白旗を掲げて降参しているように聞こえますが、そうではない。敵に町が包囲されたとき、敵が町に入り込んで略奪されないよう、このように答えるのが常であったのだそうです。外側では敵に従うふりをしながら、町の門は固く閉ざしておく。時間稼ぎをしたと言うことです。

もちろん、ベン・ハダドもこんな答えが返ってくることは百も承知です。そこで要求をエスカレートさせる。明日の今頃には家来たちを派遣して町の中にある宝をゴツゴツと奪っていくから覚悟しろ。プレッシャーをかけて全面降伏させるのを狙う。

## 2 イスラエル王アハブ

### 1) 弱さを打ち明ける

イスラエルにとって国が滅ぶかどうかの瀬戸際です。アハブはどうか。長老たちを招集してアドバイスを求めます。7節。「あの男が、こんなにひどいことを要求しているのを知ってほしい。彼は人を遣わして、私の妻たちや子どもたち、および、私の銀や金を求めたが、私はそれを断りきれなかった。」

アハブはどのような性格の人だったのでしょうか。エリヤに対してどんな態度をとってきたかを見ればわかります。エリヤが、アハブに「あなたの不信仰のゆえにイスラエルには今後いっさい雨は降らない」と告げたとき、アハブはエリヤを國中走り回って探し出そうとし、見つからないことがわかると、今度は主を信じる預言者を次々と捕まえて数百人の規模で虐殺した。そういう人です。

そんな強気一辺倒のアハブでしたが今どうなったか。アハブは「私はそれを断り切れなかった」と言っている。自分には勇気がなくて敵の要求を断り切れず、ずるずると受け入れてしまった。そう言っている。ここには王としての威厳もなにもありません。自分の恥を長老たちに打ち明けている。今までアハブの姿から想像もできない変わりようです。

### 2) 長老たちの意見

長老たちの答えはこうでした。8節。「聞かないでください。承諾しないでください。」「きつぱりなことわるべきです。」実に勇ましい答えですが、ベン・ハダドの要求を拒絶すれば、戦争になることは火を見るよりも明らかです。では長老たちにはこの時点で戦争に勝つ自信があったのか。アハブは敵には勝てないと思ったので、要求をずるずると飲み込まざるを得なかったわけです。長老たちに勝算があったとはとても思えない。それなのに、なぜ承諾しないでくださいとアドバイスしたのか。これが不思議です。

それはそれとして、とにかくアハブはアドバイスに従って要求を拒んだ結果、恐れていたとおりにベン・ハダドは宣戦布告をします。そのときアハブは11節でこう言っています。「こう伝えてくれ。『武装しようとする者は、武装を解く者のように誇ってはならない。』」

日本語に「取らぬ狸の皮算用」という格言がありますが、それとほとんど同じ意味だそうです。戦

争がまだ始まっていないのに、ベン・ハダドが戦争に勝ってサマリアはもう自分のものだと考えている、そのことを皮肉っているわけです。でもそんなことをしている余裕がアハブにあるのでしょうか。どのようにして戦いに勝とうと思っていたのでしょうか。

### 3) 一人の預言者

アハブがこのとき主に祈ったとか、主に助けを求めたというようなことは何も書かれていません。ところがこれも不思議なことですが、ちょうどタイミングよく一人の預言者がアハブの所へやってきてこう言うのです。13節。「主はこう言われる。『あなたは、この大いなる軍勢を見たか。見よ、わたしは今日、これをあなたの手に引き渡す。こうしてあなたは、わたしこそ主であることを知る。』」

アハブはかつて主の預言者を虐殺した人です。そのようなアハブがいま、ある一人の預言者が語ることに素直に耳を傾ける。これも不思議なことです。アハブは預言者のことばに引きつけられ、いろいろ質問する。「それは、誰によってでしょうか。」この戦争を戦えるような兵士はどこにいるのだろうか。アハブは、どこにもいないと思っていた。ところが預言者は「諸州の主張に属する若い者たち」と答える。どんな人たちなのか。普段から事務職として働いている人たちで、兵士としては全く訓練されていない人たちのことだと言われています。そんな彼らが戦う。アハブは続けて尋ねる。「だれが戦いを仕掛けるのでしょうか。」答えは「あなたです。」アハブはこれまで大きな戦いをした経験がありません。兵隊も指揮官も、ひとことと言えばみな素人集団。そんな人たちが積極的に戦いを仕掛けていきなさいというのです。誰が聞いても常識外れのアドバイスです。これまでエリヤのことばに逆らって従わなかったアハブですから、この預言者のことばなど無視してもよかったです。ところが、アハブはなぜか預言者が語ることに素直に従い、終わってみればアラム人と戦いに大損害を与え、敵を追い散らすことに成功するのです。

## 3 神

### 1) たくさんの不思議

こうしてイスラエルは危機一髪の状態から救われたわけですが、ここまでに至る過程には、不思議なことがたくさんありました。繰り返しますが、アハブが長老たちに自分の恥となることを正直に打

ち明けたことや、それに対して長老たちが「聞かないでください。承諾しないでください」とアドバイスしたこと。それにある一人の預言者が語った常識外れのことばに聞き従ったこと。いろいろある。

そのなかでも最も不思議なのは、戦争になったら勝ち目はない、どうしようかと悩んでいた、ちょうどそのとき、一人の預言者が現れたことでしょう。聖書に偶然と言うことはありません。すべては神の御支配の中で行われますから、神が預言者を遣わしたことは疑いようがない。でもなぜ神はわざわざ預言者を送ってアハブを助けるのでしょうか。アハブはよい王さまだというのならわかる。でも、彼はエリヤがどんなに努力しても悔い改めようとせず、主を捨ててバアルの神々を拝むような悪い王です。主に助けを祈ったわけでもない。そんな王さまを神はなぜ助けるのでしょうか。

### 2) わたしこそ主である

預言者は何を語っていたか。もう一度13節を読みます。「主はこう言われる。『あなたは、この大いなる軍勢を見たか。見よ、わたしは今日、これをあなたの手に引き渡す。こうしてあなたは、わたしこそ主であることを知る。』」アハブが主を知るために、そのために神はアハブを助ける。「主を知る」とは単なる頭の知識のことではもちろんありません。ほんとうに主を知ったなら、この方はきよい方ですから、この方の前にとっても出られないほど自分は罪人なのだ知らされる。それが主を知ると言うことです。罪を悔い改めて主に立ち戻って欲しい。それが神の願いです。

アハブがよい人間だからでしょうか。いいえ。彼は主を捨ててきたのです。主の預言者を平気で殺した人です。それでも神はアハブを愛し続けます。

### 3) キリストの十字架に示されていること

そうしますと、主イエス・キリストがおつきになった十字架には誰が招かれていたことになるのでしょうか。今日の箇所からわかる。アハブも招かれている。それを見て私たちは言いたくなる。「アハブのような男はさばかれるべきだ。」あるいは、「アハブを助ける神は不公平だ」と言う方もいるかもしれない。でも、よく考えてみましょう。アハブは全くの他人なのか。誰がアハブのしたことを非難できるのでしょうか。私たちはアハブと同じことをしてきたのではないですか。

このことについて、ヨハネの福音書8章7節にこんなことが書かれています。姦淫の罪を犯した女性

がイエスの前に連れて来られたとき、イエスは周りの人たちにこう語りました。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」

(ヨハネ8章7節)そして人々が黙り込んで全員去って行くとイエスは女性に言われます。「わたしもあなたにさばきを下さない。」

ひどい罪を犯した者をすぐにさばくのではなく、なんども救いの手を差し伸べようとする。そんな神を見て、神は不公平であると不満に思う前に、不公平とも思えるような救いのみわざを私たちに向けてくださった神のことを考えたほうが良いと思います。

私たちは罪人だったのです。さばきを受けなければならなかった。そのさばきを誰が受けられたのか。私たちではない。神のひとり子です。それでも神は不公平だと言うのでしょうか。

不公平とさえ思えるほどの、忍耐と寛容と慈愛を示してくださる神が、私たちの救い主であることを共に喜びたいと願います。